

## RUBeC 演習を通じて学んだこと

尾崎 龍之介

Ryunosuke OZAKI

物質化学専攻修士課程 1年

### 1. はじめに

2016年度の夏季休暇中(8/13-8/29)に、私はアメリカ合衆国カリフォルニア州バークレー市内の浄土真宗センターにある龍谷大学バークレーセンター(Ryukoku University Berkeley Center, RUBeC)で開講された学習プログラムに参加した。滞在期間中はテクニカルライティングとオーラルプレゼンテーションスキルについての講義を受講し、授業時間外は郊外の一般家庭にホームステイさせていただいた。

### 2. 本演習参加の目的

私がこの演習に参加した理由は3つあります。1つ目は、これから社会に出る人間としての教養身に付ける為です。今後の日本においては、益々グローバル化が進むと考えられ、全世界で17.5億人が使用している英語の能力や、異国の文化に関する造詣を深めておくことは、社会人になるためには重要であると考えました。2つ目の理由は、自分の英語のレベルを知る為です。私が小中高と日本の学校で学んできた英語が一体どれだけ本場のネイティブスピーカーに通じるか、試したいと思ったからです。3つ目の目的は、日本を客観的な視点で見る為です。私は生まれてからほとんどの期間を日本で過ごしたので、日本人の目から見た日本しか知りません。また、昨今ではCOOL JAPANの名目で、日本の文化が世界で人気であるという趣旨のテレビ番組やデジタル記事をよく目にしますが、果たしてそれは国外の視点から見た場合、どのように映るのか、といったことに興味があったからです。

### 3. 演習内容

本演習では、平日の月、火、木、金の午前(9:00-

11:30)はテクニカルライティングに関する講義、午後(13:00-15:00)にはオーラルプレゼンテーションスキルの講義を受けた。テクニカルライティングについての講義では、クラスメイトへのインタビューを行いその内容の文章作成や、事前準備した自分の研究に関する英文一枚要旨の文書校正を、ネイティブの講師の指導の下で行った。文書校正では、特に冠詞のミスが多いことが分かった。冠詞の概念は日本語には無い為、感覚的に使うには英語の訓練が足りないと感じたが、使う名詞が一般的な概念か特定の概念かで使い分けるということを学び、その練習を行った。また、一枚要旨の校正では異なる専攻の人たちにも分かるような文章構成への修正も行い、最終日には1対1で自分の研究についてのプレゼンを行った。クラスには私の専攻以外の生徒も沢山おり、初めは自分の研究について英語で説明するのがとても難しく、自分の研究について理解してもらうことができなかったが、何度もやっている内に、専門用語を分かり易い言葉で置き換えたり、図やボディランゲージを用いたりすることで理解してもらうことができるようになった。オーラルプレゼンテーションスキルの講義では、英語でのプレゼン方法からジェスチャーやボディランゲージ、アイコンタクトの重要性を学んだ。英語のプレゼンではスライドの見やすさ以上にアイコンタクトやボディランゲージが重要であり、特にアイコンタクトは、オーディエンスが自分の発表についてきているかを判別するのに役立ち、オーディエンスが難しい表情をしていた場合は、その都度簡単な単語で説明したり、ボディランゲージをつかったりすることでオーディエンスの理解を促す、といったプレゼンの手法も学べた。我々研究者は、得てして研究成果にばかり目が行きがちであるが、プレゼンとは聴衆の理解なくして成り立たないものである、ということを改めて強く認識させられた。最終日のプレゼンに向けた準備では、事前に作成したスライドでは、専門外の人間には分からないということが分かったので、大幅に修正し、異なる専攻の人たちにもわかり易い

ようなスライドを作成した。その結果、流暢な英語は話せなかったものの、何とか専門外の人たちにも分かってもらえたように感じた。

#### 4. 企業・大学訪問

今回の演習中に、THERMAL TECHNOLOGY LLC社とカリフォルニア大学デービス校の視察も行った。THERMAL TECHNOLOGY LLC社は金属やセラミックの焼結や熱処理の為の高温炉を受注生産している会社で、アメリカ国内では唯一SPSを扱っており、3M社やNASAとも取引がある会社である。受注生産であるため、社内には製品の特性について顧客と相談する為の部屋や、試作した製品のテストラボなどがあった。この会社の視察で、私が最も驚いたのは、自由な働き方であった。会社の敷地内はビーチバレー用のコートがあったり、社員が皆私服であったりした。中には音楽を聴きながらや電話をしながら作業をしている人もいた。これは日本ではなかなか見られない光景であるが、もし、安全対策や仕事の成果がきちんと上がっているならば、これから少子高齢化により経済規模の縮小が懸念される日本においても、このようなワーキングスタイルの多様化は企業が生き残る戦略の一つとしては良いのではないかと、ふと思った。最後に、我々が視察を受け入れてくれたことに対して感謝の気持ちを伝えると、「こちらこそ視察してくれてありがとう」と社員は笑顔で言ってくれた。

カリフォルニア大学デービス校の視察では、その広い敷地内を歩き、様々な施設についての説明を聞いた。デービス校は農学やバイオサイエンスの分野では、全米で1, 2を争うほど有名で、キャンパス内には専用の実験農場や牧場があり、非常にスケールが大きいと感じた。また、キャンパス内の一角には地質工学研究所があり、今回、我々は施設内を視察することができた。そこでは、建物や油田、橋の

土台の地中でのモデリングによる地震や津波、液状化についての研究が行われており、所内には半径が9mもの遠心機が設置されていた。この遠心機は物質の分離を目的としたものではなく、地下50mの土中の環境を再現するための装置であり、500kWのモーターによって、10tのモデルセルが最大90rpmで回転し、その遠心力によってモデルに対し75G（これが地下50mの環境であるそう）もの力を加えることができる。モデルを設置するセルには振動を起こす機能が備わっており、最大40Gの振動を加えることができる。さらに、セルには200以上の検出器やカメラが備え付けられており、回転・振動中の加速度や水圧、応力などを計測することができ、これにより地震が起こった時に地中でどのような変化が生じているのかを解明することができるのだという。また、この実験は下準備に非常に手間がかかる為、1つの実験に対し院生が2人がかりで毎日行っても2か月かかり、また75,000\$もの費用がかかるのだそう。この視察で私が最も感心したことは、実験や施設のスケールの大きさである。これは、アメリカの大学全体に言えることであるが、施設が非常に充実しており、最早企業城下町ならぬ大学城下町である。食事や売店のみならず、劇場や映画館、挙句の果てには専用の警察署や消防署までもがあった。このような施設の充実度は他国の追従を許さないと感じた。

#### 5. おわりに

今回のアメリカ滞在中で、多少なりとも英語の能力が向上したと感じた。しかし、ホストファミリーやスーパーの店員との会話では理解できなかった時が多々あったので、自らの無能さを痛感した。この悔しさをばねにこれからも継続的に英語の学習を行う必要があると考える。